

在日朝鮮人運動における音楽活動

——朝連文化部の事例から——

金 理花

はじめに

朝鮮植民地支配からの「解放」を迎えた在日朝鮮人は、日帝の植民地支配によって独自の繁栄を阻害されてきた民族文化を主体的に営みはじめた。なかでも大衆組織として広範な民族運動を展開した在日朝鮮人連盟(以下、朝連)^①は、「解放」直後から文化活動にも取り組み、一九四九年には「文工隊中央協議会」を組織^②、文化の大衆化を具体的に実践する活動をおこなった。しかし、朝連の文化活動は当初から文化の大衆化を主目的としていたわけではなかった。そのことをうかがい知る手がかりとして運動体が展開した音楽活動を挙げられる。朝連が実

施した音楽活動の組織方法や演目内容を見ると、当初は人びとを観衆として動員する観賞型の公演が組織され、国際親善や同胞大衆への慰安事業・啓蒙活動としておこなわれていた。だが、文化活動が「大衆乖離」に陥っていたことへの反省と、同胞大衆を運動に網羅するための実践的な役割を音楽活動に見出していくにしたがつて、次第に大衆を意識した大衆参加型の音楽活動へと移行していくのである。このことから、運動の展開において音楽活動が担っていた役割や意義の考察は在日朝鮮人運動史においても明確な課題であるといえ、本稿が運動における音楽活動に着目する意図はここにある。

しかし、在日朝鮮人運動における音楽文化やその活動が考察された史的研究は少ない。在日朝鮮人運動史の礎

を築いた朴慶植の研究では、音楽活動について一部言及されているものの十分ではなく、活動への評価は史料に記された内容を引き継ぐにとどまり具体的な分析には至っていない⁽³⁾。山根俊郎⁽⁴⁾は、「解放」後に朝鮮人の民族運動で盛んに歌われた解放歌謡や文化運動についてまとめた基礎研究に値するものであるといえる。だが、資料集

としての側面が強く、やはり民族運動における音楽活動の意義を十分に分析するまでには至っていない。これに対して呉圭祥⁽⁵⁾は、朝連の音楽活動の概要を当事者史料から検討しており注目されるが、それが運動としていかなる意味を持つのかといった、音楽活動に対する評価や意義の分析は朴の研究と同様、史料からくみとった当時の評価に依拠するにとどまっている。これに対して成恩暎⁽⁶⁾は、朝連によるオペラ「春香」上演企画について「文化活動方針」の樹立過程と併せて検討、朝連の文化運動が持つ意味について考察をくわえており重要であるといえる。成は考察から、朝連はオペラ「春香」がもつ大衆の民主主義意識昂揚すなわち大衆啓蒙のための「社会性」と、国際文化との提携という「世界性」の二点に注目したことを指摘した⁽⁷⁾。これは本稿が論じる国際親善や大衆

慰安・啓蒙を目的とする観賞型の公演に類似するものであるといえるが、成の分析はオペラ「春香」を中心に行っているため、朝連の文化活動が観賞型の企画から大衆参加型の音楽活動としていかに展開するのかについての考察には至っていない。

また本稿は、在日朝鮮人の音楽文化史研究にとつても資するところがあると考える。そもそも「解放」後の在日朝鮮人の歴史について考えるとき、音楽文化が対象になるということは一部の研究を除きほとんどなかった。宋安鐘⁽⁸⁾は、音楽芸能にたずさわった朝鮮人の個人史を丹念に掘り起こし、植民地期から現代までの一〇〇年を音楽文化史として記述した数少ない研究の一つであるが、在日音楽の一〇〇年をうたいながらも民族運動において演奏されてきた音楽や活動への考察はなされない。また、音楽文化やその活動に対しては作り手(演奏者・運動体)のみならず受け手(聴衆)への考察も伴わなければならぬが、宋の研究は前者への分析にとどまっている。本稿もまた、運動体への詳細な分析を優先したため、受け手である同胞大衆の視点からの考察はおこなっておらず、一面的な考察にならざるを得ない限界を有している。そ

のため、ここでは作り手と受け手双方への分析視角が音楽やその活動を詳細に検討するうえで重要であることを指摘し、受け手への考察については稿を改めて論じることとしたい。

よって本稿では、「解放」後在日朝鮮人運動における音楽活動、特に朝連による音楽活動の事例に内在し、それが運動として果たした役割や意味を、音楽活動の組織方法や演目内容の変化に注目しつつ考察することを目的とする。運動体による音楽活動は、どのような課題に基づきいかに実施され、あるいは展開したのだろうか。以上の問いに基づき考察を進めていく。

まず、一九四五年末と一九四六年初めに開催された、朝鮮独立祝賀大会と同胞慰安大会について検討し、音楽活動に期待された役割が慰安や親善であったことを会議録や演奏されたプログラムの内容から明らかにする。次に、音楽活動が啓蒙活動の一助として動員される過程を地方巡回楽団の事例から検討し、運動体が音楽活動を啓蒙活動に活かしたいと考えていたことを明らかにする。しかし、必ずしも運動体の意図した通りにはならなかったため、その要因についても考察したい。そして、運動

体が従来の活動への反省から、文化大衆化を目的とする大衆参加型の活動を実施し、それが文化啓蒙活動に結びつけられていく過程を論じたい。

一、慰安と親善のための音楽活動

一九四五年八月一日、日本がポツダム宣言を受諾したことが発表され、朝鮮は植民地支配からの「解放」を迎えた。在日朝鮮人は朝鮮半島への帰還を目指し、これにともない帰還や未払い賃金の争議を目的とした民族団体が全国各地につくられた⁹⁾。これらを糾合するかたちで同年一〇月一日に朝連創立全国大会が開かれ、朝連が結成された¹⁰⁾。

朝連において音楽活動を担った機関は文化部であった。文化部主催による音楽活動は、朝連結成からわずか二ヶ月後の一九四五年一二月に開催された音楽会「朝鮮独立祝賀大会」から発足した。その後、一九四六年二月には「同胞慰安大会」を開催、同大会の好反響を受けて「地方巡回楽団」が同年の二月以降に組織された。この期間の音楽活動について、「在日朝鮮文化年鑑」(以下、「年

鑑)では「質的にも非常に貧弱」であったと厳しい評価がつけられている。⁽¹¹⁾ 朴慶植も「三全大会(一九四六・十)前後の朝連文化部の活動は主として民族教育に終始していた」⁽¹²⁾として、成恩暎もこの時期の音楽活動は目立った成果を得られなかったと指摘している。⁽¹³⁾

このように、一九四六年前後の段階における音楽活動は決して活発なものではなかったとの見解もある。確かに、この時期の文化部の活動は教育事業に集中しており、音楽活動などその他の文化活動は限定的なものにならざるを得なかっただろう。それでも、音楽活動に対する運動としての可能性が見いだされなければ、朝連結成二ヶ月で音楽会を開催することはおろか、その後三ヶ月あまりでさらに二つの音楽活動を企画し実行するには至らなかったともいえる。しかも企画の一つは自前で楽団を組織し全国巡回させる規模のものである。結果として目立った成果がみられなくとも、朝連が音楽活動に運動としていかなる役割を期待したのかについて、企画や演奏内容を考察し再評価をおこなう余地はあると考ええる。

1. 朝鮮独立祝賀大会

朝鮮独立祝賀大会は、一九四五年一月二日から二三日にかけて神田共立講堂⁽¹⁴⁾にて開催された。主催者名は国際芸術団となっているが、管見の限り同団体名で他の演奏活動をおこなった事例が確認できないこと、朝連の全体大会や中央委員会では文化部の活動報告として取り上げられていることから、国際芸術団は形式上使用した名称であり、実際には朝連の主催であったといえよう。朝連第三回全国大会文化部活動報告⁽¹⁵⁾では、同企画の目的について「朝鮮民族解放の一九四五年を送年するにあたって、①解放軍である連合軍に対する感謝と慰労の意を表し、②東京内各外国人団体または日本の各民主主義団体を招請し芸術を通じた国際的親善を企図しようとすることにあり、③そこに兼ねて同胞たちに慰安を与え、ひいてはこの方面における水準の向上に多少なりとも力になればという意図」のもとに開催したと報告している。⁽¹⁵⁾

報告にも記されている通り、この音楽会が観客として想定していたのは連合軍関係者や外国人団体、進歩的日

本市民であり、対外事業としての性格が強い行事だったといえる。実際、文化部では入場者数を制限した上で招待券を発行しており、その半数以上を連合軍用の席として提供した。だが、クリスマスが近かったこともあり、肝心の連合軍関係者の来場は少なかつたとの報告もなされている⁽¹⁶⁾。

プログラムにかんする史料は管見の限りないため、実際どのような上演内容であったかは明らかではないが、企画段階で想定していた観客層と出演者の顔ぶれから、クラシック音楽等が主であったと推測される。報告では、声楽、奏楽、舞踊の演奏後に「専門的立場からの分析で好評を受けた」とあり、演奏技術の水準は決して低くはなかつたようだ。主な出演者には、金永吉（永田絃次郎）、金文輔、白成珪といった男性歌手の名が挙げられており⁽¹⁷⁾、共演者にはロシア、オランダ、ドイツ、日本の人びとも含まれていた。なかには、当時東京音楽学校の嘱託講師であったウィリー・フライなどの名演奏家も参加していた⁽¹⁸⁾。「年鑑」における音楽会の評価では、「金文輔氏が長年の沈黙を破って日比谷（ママ）に登場したことも印象深いことだった」とも記されており、在日朝鮮人の演奏

家たちが「解放」を契機に、演奏活動を再開していた様子⁽¹⁹⁾がうかがえる。

音楽会の目的には同胞大衆への慰安も含まれていたが、「この方面における水準の向上に多少なりとも力になれば」とあるように、そもそも大衆文化に寄りそう趣旨の企画ではなかつた。さらに、同報告では「遺憾だったのは、同胞の観客水準が低劣であつたため、音楽会の内容を十分に理解できず、国際的会席の空気を多少なりとも散乱させた」とある。これは、プログラム構成が大衆に馴染みのないものであり、本企画が同胞大衆を副次的な対象とみなしていたことがうかがえる。実際、文化部が発行した朝連の機関誌である『朝連文化』には「あまりにも大衆を無視した『高級芸術』であつた」との批判が掲載されている⁽¹⁹⁾。

2. 同胞慰安大会

次に、同時期におこなわれたもう一つの音楽活動である同胞慰安大会についてみていきたい。慰安大会という催しは、朝連や在日本民主青年同盟（以下、民青）、在日

本民主女性同盟（以下、女同）の地方本部・支部単位の規模で活発におこなわれており、⁽²⁰⁾ 朝連埼玉県本部の川口支部では独自に軽音楽団が組織され、演奏活動をおこなっていた様子も伝えられている。⁽²¹⁾ 慰安大会はこうした地域レベルで開催されるのが一般的だったようだが、朝連文化部という運動体の中央機関が独自に慰安大会を企画した事例はあまりなく、希少といえる。

朝連文化部主催の同胞慰安大会は、一九四六年二月三日に神田共立講堂で開催され、大雪にもかかわらず観客が詰めかけ大盛況であった。⁽²²⁾ 出演者は張飛、金亀煥、金慶愛など声楽家のほかに、朝連中総部員、川口支部の軽音楽団も出演した。⁽²³⁾ 他にも朝連戸塚学院児童合唱団の出演も記載されており、バラエティに富んだ上演内容だったことがうかがえる。会議録の付録に同胞慰安大会の会順が掲載されているので、以下では上演内容を詳しくみてみよう。⁽²⁴⁾

会順によれば、同胞慰安大会は午前と午後に分けられており、午前の部では黙想、開会辞に続いて、本国特派員である李浩榮、姜昌浩、尹槿らによる本国情勢報告、具明淑の講演「婦人に告げる」のあとに、「朝連ニュース」

一号、二号が上映された。報告では、この朝連ニュースが観衆の関心を強くひいたとされており、⁽²⁵⁾ 当時は五号までの製作が予定されていたことも踏まえると、⁽²⁶⁾ ニュース映画は同胞大衆への宣伝活動に有効な方法として採用されていたと思われる。最終的には一三号まで制作された。⁽²⁷⁾

午後の部では、さらに四つの催しが組まれており、

(一) は声楽家を中心にした独唱・重唱、オリジナルの合唱劇と音楽喜劇、(二) は川口文化部軽音楽団による、独唱や独奏、舞踊の上演、(三) は戸塚学院児童合唱隊による合唱やピアノ独奏、遊戯の披露、そして(四) は名唱会と称され、詩や短歌の朗読などがある。複数の出演団体があること、豊富な上演内容だけをとっても、この同胞慰安大会は規模の大きな企画であったといえる。

演奏された曲目の特徴としては、民族運動のなかで歌われていた解放歌謡や民謡といった朝鮮語の歌謡が含まれている一方で、午後の部(一)の声楽家を中心にしたプログラムでは、イタリアオペラのアリアやアメリカ民謡、ロシア民謡などもある。植民地期に開花した啓蒙期歌謡からは《몽선화(鳳仙花)》などクラシックの作曲様式に近い曲が選ばれているなど、声楽家層の演者が西洋

表1 同胞慰安大会々順				
時間	演目区分	出演者	上演内容	備考
午 前 順	開会/黙想/開会辞			
	講演	李浩榮/姜昌浩/尹權	本国情勢報告 婦人に告げる	
	講演	具明淑		
午 後 順 (一)	1. 独唱 テナー	金亀煥	朝連ニュース	朝連文化部編/1号, 2号
			愛国歌	安益泰曲/解放歌謡
			独立の朝	
			農民歌	金順男曲/解放歌謡
			解放の歌	
			私たちの歌	
	2. 独唱 ソプラノ	金慶愛	かんもを忘れて	朴泰俊曲
			落花岩	梁由貞曲
			歌劇「トスカ」より「星は光りぬ」	ブッチーニ曲/アリア
			鳳仙花	洪蘭波曲/啓蒙期歌謡
	3. 独唱 バリトン	張飛	来て	玄済明曲
			小夜曲(セレナーデ)	詳細不明
			帰れソレントへ	イタリア(ナポリ民謡)
			オールド・ブラック・ジョー	フォスター曲/アメリカ
深い河(ディープリバー)			黒人霊歌	
4. 二重唱 テナー ソプラノ	金亀煥/金慶愛	一字不明シレント(デキシーランド)	アメリカ民謡	
		ステンカラージン	ロシア民謡	
5. 合唱劇	鄭博 外2人	ボルガの急流		
		舟歌(ボルガのボートマン)		
6. 音楽喜劇	マニム・テナー/金亀煥 モスム・バリトン/張飛	大同団結(1景)	鄭博作詩	
		マニムとモスム(1景)	尹福鎮詞/朴泰俊曲	
(二) 川口文化 部 軽音楽 団 演 奏	1. 独唱 メゾソプラノ	金彩玉	母上前上書	孫牧人曲
			トラジ打令	
			河の水は流れて	民謡
	2. 独唱 ソプラノ	金彩玉	駅馬車	金海松曲
			沙鉢歌(サバルガ)	京畿民謡
	3. 舞踊	金彩玉	白頭山を探して	新民謡
4. 独唱 バリトン	李錫圭	処女総角		
		舟歌	民謡	
5. 舞踊(双舞)	金彩玉/金彩玉	関西千里	地方舞踊	
		陽山道	民謡	
6. 独奏 サクソフォン	朴鎮雄	ドリゴのセレナーデ(小夜曲)	リカルド・ドリゴ曲/ バレエ音楽	
(三) 戸塚学 院 演 奏 隊 児 童 合 唱	1. 合唱	戸塚学院児童合唱隊	バランセ(青い鳥)	童謡
			ハルミロク(おきな草)	
			ケナリロク(ケナリの花)	
			鍛冶屋おじいさん	
	2. ピアノ独奏	韓光愚	ノリゲ箱子	オーストリア民謡
カッコウ鳥				
3. 遊戯	戸塚学院児童合唱隊	元気に進もう	詳細不明	
		みんなあつまれ		
		机の上の玉童		
(四) 名 唱 会	1. 朝鮮詩	崔仁成	三百年前古謡	
	2. 短歌	安甲善	南道短歌	
	3. 謔謡、民謡	徐泰源	総角陣情書	謔謡
			ノドゥル江辺	民謡
4. 六字ベギ(真陽 譚)	安一成	六字ベギ	雑歌/南道民謡	

注「文化部活動報告(朝連第三回全国大会)」六四~六七頁より筆者作成

音楽を得意としていたことがわかる。

他方で、(二) 川口文化部軽音楽団の演奏プログラムは流行歌や民謡などを中心に構成され、声楽家層のものと対照的に西洋音楽は一曲のみである。植民地期の代表的な流行歌作家である孫牧人の曲をはじめ、《치녀춤》(処女総角)≡や《뽕노래》(舟歌)≡《양산도》(陽山道)≡といった同胞大衆なじみのある流行歌と民謡の演奏を得意としていたようである。戸塚学院児童の合唱では、朝鮮語の童謡が演奏された。このように、演奏者の層によって選ばれる曲目がはつきりと分かれていたことが、同胞慰安大会のプログラムからは明確に見てとれる。

文化部の報告にて、同胞慰安大会が大成功を収めたと高く評価されているように、この企画は、前述の朝鮮独立祝賀会とは対照的に同胞大衆からの反響が大きかったと考えられる。その理由としては、朝鮮独立祝賀会でも演奏されたであろうクラシックや西洋音楽を取り入れつつも、同胞大衆が身近に接していた流行歌や民謡などが含まれた企画内容であったことがあげられる。前述の『朝連文化』には、同大会についての様子と意見が紹介されており、「あるときは「引っ込め」と観衆が怒鳴り、ある

ときは「アンコール」と拍手した」様子や、「芸術家だという者がやることには興味ない」と言い「素人あるいは街頭芸人のものが良い」とする者」がいたという意見がある⁽²⁸⁾。逆に「文化部は今後、街頭芸人のような売笑婦的なことをやめてもう少し芸術的なことをせよ」と、川口文化部軽音楽団の演目への批判と思われる意見もあつた⁽²⁹⁾。ごく一部の聴衆の声ではあるが、同大会が豊富な上演内容によって構成されたことよって、さまざまな層の同胞大衆のニーズに対応した様子がうかがえる。

本章では、一九四五年末から一九四六年初頭にかけて開催された、朝連主催の音楽活動について考察をおこなった。朝鮮独立祝賀会も同胞慰安大会も、その開催目的は対外交流や親善、慰安事業が主であった。両者とも観賞型の公演として組織されていた点では共通性があるが、後者では流行歌や民謡など同胞大衆に身近な音楽が取り入れられたことにより観衆からの好評を博し、前者では同胞大衆を副次的な対象として捉えた演目内容であったため同様の反響はみられなかった。

次章では、同胞慰安大会の成功を朝連の組織強化と啓蒙運動の拡大に活用しようとした事例として地方巡回楽

団について検討し、運動推進にあたって音楽活動が同胞大衆へ働きかけるための一つのツールとして見出される過程を考察してみよう。

二、大衆啓蒙と巡回する音楽活動

同胞慰安大会の成功により、各地から慰安隊への派遣演奏要望が寄せられた。第二回文化部長会議における報告ではこれに対し「各地方から慰安隊を送ってくれという要望が多かったため、中総では慰安隊を組織して各地方に派遣すると同時に、遊説隊を同行させ、組織強化と啓蒙運動に大きな役割をするであろう」と考えた⁽³⁰⁾とある。朝連は、遊説隊員を同行させ、本国・国際情勢の伝達や朝連の組織拡大強化のための啓蒙活動として活用すべく、すみやかに巡回楽団の組織にむけて動いた。また、同時期にはオペラ「春香」上演企画が水面下で進められていたが、この企画も同胞大衆の民主主義意識昂揚、すなわち大衆啓蒙の役割を期待されていた⁽³¹⁾。オペラ「春香」についてはすでに先行研究の分析があることと、企画が文化部長会議において正式に決議されるのは一年後の一九

四七年以降であるため、以下では、これに先行する事例として一九四六年二月以降実施された巡回楽団の活動を具体的に検討する。その上で、巡回楽団の活動がなぜ啓蒙活動と結びつけておこなわれたのかを考えてみよう。

1. 地方巡回楽団の編成と解団

(1) 活動範囲と上演内容

まず朝連文化部の巡回楽団派遣の目的を確認してみよう。報告では「地方遊説隊員を同行させ、大衆的集合を利用し朝連の組織拡大強化させることに重点があり」「本国情勢国際情勢を知らせ、一般の啓蒙にこの機会を利用させ」「兼ねては、これまで私たちにはなかった娯楽機関を通じて同胞たちへ慰安を贈ろうという点」が目的であると述べられている⁽³²⁾。これは、同胞大衆を集めやすい慰安大会を全国の地域において開催し、そこに集う人びとへ朝連の活動宣伝、朝鮮半島と国際的な情勢についての情報伝達を試みようとしたといえる。慰安大会という名の企画であるにもかかわらず「同胞たちへ慰安を贈る」点はあくまでも啓蒙活動に兼ねられていることから、

表 2 地方巡回楽団上演日程

日程	第一班(関西班)	第二班(東北班)
1946/2/12	鶴見(神奈川)	
2/13	横須賀(〃)	
2/14	世田谷(東京)	
2/16	長野市(長野)	
2/17	飯田(〃)	
2/19	伊那(〃)	
2/22	下関(山口)	
2/23	小野田(〃)	
2/26	海田市(広島)	
2/27	尾道(〃)	
2/28	府中町(〃)	
3/2	庄原(〃)	
3/3	新見(岡山)	
3/4	倉敷(〃)	
3/5	岡山(〃)	
3/6	津山(〃)	
3/8	姫路(兵庫)	
3/9	明石(〃)	
3/10	神戸(〃)	
3/11	尼崎(〃)	
3/12	大阪(大阪)	大阪(大阪)
3/13	〃(〃)	〃(〃)
3/14	高田(奈良)	高田(奈良)
3/15	〃(〃)	〃(〃)
3/16	京都(京都)	京都(京都)
3/17	〃(〃)	〃(〃)
3/18	大津(滋賀)	
3/20	岐阜(岐阜)	
3/21	〃(〃)	
3/22	名古屋(愛知)	高崎(群馬)
3/23	〃(〃)	
3/24		小山(栃木)
3/25	静岡(静岡)	
3/26	三島(〃)	
3/27		浦和(埼玉)
3/28		土浦(茨城)
3/29		水海道(〃)
4/1		芝支部(〃)
4/4		児玉(〃)
4/9		京橋支部(東京)
4/15		淀橋支部(〃)
4/16		N・Y・K(連駐軍)
4/18		豊岡(〃)
4/19		目黒支部(〃)
5/4		船橋(千葉)
5/22		本部(岩手)
5/23		〃(〃)
5/24		晴山(〃)
5/25		花巻(〃)
5/26		水沢(〃)
5/27		〃(〃)
5/28		黒沢尻(〃)
5/29		一関(〃)
5/31		盛支部(〃)
6/1		高田分会(〃)
6/2		大般渡(〃)
6/5		釜石(〃)
6/6		〃(〃)
6/7		大橋(〃)
6/9		宮田(〃)
合計	34ヶ所	35ヶ所

注「文化庁活動報告(朝連第三回全国大会)」六四～六七頁より筆者作成

運動体は人びとを動員するためのツールとして娛樂機関つまり音楽活動を利用していたことがうかがえる。地方巡回楽団を編成しようという動きは同胞慰安大会以前にもあったが、経済的、人的条件の問題により整備が遅れており、同公演の成功をはずみに実現を急いだよう⁽³⁴⁾だ。巡回楽団は第一班と第二班に分けられ、第一班は関西班として、山口県から東海道沿線一帯を一九四六年二月一二日から一ヶ月半以上を巡回、第二班は東北班

として三月一二日から二ヶ月余り活動した。第一班は金亀煥、第二班は李景洲を中心に組織され、いずれの班も朝連ニュースを携行し上演したと報告されている⁽³⁵⁾。以下では、文化庁活動報告書を元に作成した表に沿って巡回楽団の活動日程と演奏内容について検討してみよう。第一班は二月一二日に神奈川の鶴見での公演を皮切りに、東京、長野、山口、広島、岡山、兵庫、大阪、奈良、京都、滋賀、岐阜、愛知、静岡の各都市、計三四箇所を

表 3 地方巡回楽団上演内容		
	第一班	第二班
1	独立の朝/私たちの歌	開幕演奏
2	リンゴの唄/誰が故郷を思わざる	独唱 解放の歌/独立の朝
3	処女総角/木浦の涙	楽団演奏
4	番地のない酒幕/チョンサチョロン	独唱 ノドゥルの江辺/密陽アリラン /トラジ打令
5	トラジ風景	舞踊
6	ピアノ独奏	舞踊
7	寿一と順愛	楽団演奏
8	長崎物語り/伊那の勘太郎	独唱 建国行進曲/朝鮮の春/朝鮮八景
9	ハワイアンキータ	舞踊
10	漫談	全唱 青春である
11	朝連バンド/アリラン 陽山道	舞踊 処女総角
12	舞踊	光る朝鮮
13	連絡船は出ていく/結婚で送り出して	
14	農民歌/解放の歌	

注「文化部活動報告（朝連第三回全国大会）」六八～七一頁より筆者作成

巡った。前半の東京から長野、山口を巡る際は、二、三日の公演と移動のための数日を繰り返しながら進んでいるのがわかる。兵庫に入ってから移動をしながらほぼ連日公演をおこなった。

一方、第二班は、第一班の初演からひと月後の三月一二日に大阪で公演をおこない、奈良、京都を経て、群馬、栃木、埼玉、茨城、東京、千葉、岩手の各都市、三五箇所を巡った。第二班の大阪、奈良、京都公演については、第一班も同日同地域で公演をおこなっていることから、合流して合同公演をおこなった可能性がある。関西地域から関東へ入ると首都圏を巡り、東京では五回の公演をおこない、内一回は進駐軍を観客におこなったとある。二週間ほどの休止期間を経て、五月四日からは岩手にて一五箇所を巡りほぼ連日の公演となった。

第一班、二班とも、かなりハードな上演日程であり精力的な企画であったといえる。体力的にもハードであるが、両班合わせて六九箇所を集団で巡るため、経済的にも負荷がかかっているはずである。事実、後になって巡回楽団は解散しているがその理由の一つに財政の問題も上がっている。楽団の解散については次項で検討する。

次に、演奏内容についてみてみよう。両班とも一〇以上の演奏を用意しており、解放歌謡、朝鮮民謡、流行歌、クラシック歌曲が確認できる。他にも舞踊や器楽演奏、漫談やバンド演奏もある。解放歌謡は、《해방의 노래》(解放の歌)《독립의 아침》(独立の朝)《농민가》(農民歌)《빛나는 조선》(光る朝鮮)《건국행진곡》(建国行進曲)《양산도》(陽山道)《노들강변》(ノドウルの江辺)《밀양아리랑》(密陽アリラン)《노라지타령》(ノラジ打玲)《조선발경》[가] (朝鮮八景) といった曲目が揃っている。流行歌は《먼지없는 주말》(番地のない酒幕)《목포의 눈물》(木浦の涙)《런락선을 떠나간다》(連絡船は出ていく) といった植民地期のものから、一九四六年当時に流行っていた日本の流行歌《リングの唄》などもある。流行歌がプログラムに含まれているのは一班の公演のみである。演奏内容については、大衆を意識した選曲であることが特徴として指摘できる。言い換えるならば、クラシックの演目を除いた同胞慰安大会のプログラムに近い。こ

のような選曲がなされたのは、集客力を意識したからではないかと思われる。もちろん、演者が得意としていた音楽のジャンルともかかわっているだろうが、出演者の全容がわからないためその点の詳細な検討はできない。とはいえ、巡回楽団は同胞慰安大会が好評を博したことで実現した企画であり、前述の派遣の目的においても「大衆的集合を利用し」とあるように、運動の一助として集客力の面が買われたことは間違いない。そうした経緯を踏まえるならば、選曲についても集客力との兼ね合いが作用したとみることができだろう。

(2) 啓蒙活動への応用失敗

当時としては精力的に展開された巡回楽団の活動であるが、第二班の公演終了を待たずして朝連文化部では四月三〇日を以ってこれを解散させた⁸⁶⁾。その後も事前に公演が予定されていた千葉県一箇所と岩手県一五箇所にかんしては上演を続行したが、それ以外の上演はなかった。

巡回楽団を解団した主な理由については、第三回全国大会における文化部の報告では「この巡回楽隊は、地方によつては相当な効果を得たが、団員たちの無自覚な行動

と、地方の財政をあまりにも過重に負担させたこと、また内容にあつて斬新なものになつたなどさまざまな批判が多かつたため」としている⁽³⁷⁾。批判の自身にかんしては詳細に述べられていないが、「楽士や歌手らの意識水準が浅薄で、全体的にみてむしろ同胞大衆からの批判を受けた」と総括されていることから、出演者に何らかの問題があつたとみられる。

第二回全国文化部長会議録ではこれにさらに踏み込んでおり、「慰安隊を派遣したが、適当な人員の不足で啓蒙運動には何の力にもならず、ただ慰安においてある程度の効果があつただけであ」り（傍点引用者）、「巡回音楽隊を中総では正式に解散させ、将来啓蒙活動もこなせる優秀な芸術家を以つて音楽隊を再組織する意向」としている⁽³⁸⁾。団員たちの無自覚な行動とは、啓蒙活動の遂行にあつてふさわしくない何らかの言動をさしていると思われ、それが巡回楽団の主要目的の達成に支障をきたしたようである。つまり、巡回楽団は人員の問題等により主目的であつた啓蒙活動を達成できず、慰安の提供という副次的な目的の達成にとどまつたため、解散したというわけである。このことから、巡回楽団は、同胞慰安

大会の成功を受けて企画された啓蒙活動の一形態であり、慰安大会よりもさらに運動的側面に踏み込んだ活動であつたといえる。

巡回楽団が解散したのは、啓蒙活動として期待していた成果が出なかつたからであるが、演奏を同胞大衆に披露して巡るという活動方法の応用限界性もあつたと考えられる。観賞型の音楽活動は大衆をその場に動員するには効果が見込めるが、より効果的に動員するには聴衆の関心を惹きつける上演内容も求められる。そのため、啓蒙活動に資する上演内容だけを揃えるわけにいかないというジレンマを抱えるのである。ただし、解散時点においては「優秀な芸術家を以つて音楽隊を再組織する意向」とあるように、この点について必ずしも自覚的なわけではない。だがこのジレンマは、その後の活動が大衆参加型の音楽活動へと移行することによって一定の解消をみるのであるが、これについては第三章で検討する。

次節では、なぜ、音楽活動が啓蒙活動に結びつけられたのかを考えるために、啓蒙活動が文化部においてどのような位置にあつたのかを検討してみよう。

2. 当面の居住と啓蒙活動の提起

朝連文化部は、一九四六年時点で活動の主目的をいかに定めていたのだろうか。同年六月に実施された朝連第二回全国文化部長会議において文化部活動報告をおこなった李相堯部長は、それまでの朝連の活動の中心が「帰国同胞の保護と同胞の財産保護問題にあった」と振り返り、「本国情勢をみるとき帰国同胞はだんだんと減っており、そのまま残ることになる同胞が相当に多いということを考えるとき、これからは文化活動が中心にならなければならぬし、文化部が主動的に在留同胞を率いていかなければならない」と提言した⁽³⁹⁾。このように、文化活動が重要視されたのは、在日朝鮮人が朝鮮への帰還を見合わせ、当面の間日本に居住することが現実味を帯びてきたことが背景にあった。刻一刻と情勢が変化するなかで、同胞大衆への文化活動の展開という役割を朝連文化部が引き受けることになった。

さらに、尹權中総委員長は同会議の開会辞において、在留している八〇万人の同胞のなかに不良な行いをする

者たちがいることに懸念を示しながらもその理由を「学べなかつたことと教養がないことに原因があると考ええる」と述べている⁽⁴⁰⁾。そしてその対策についても「力で押さえつけるのではなくできる限り教え、指導しなければならぬ。この先残留する同胞を教育する責任はここに集まったみなさんにある」とし、文化活動のなかでも同胞大衆への教育、すなわち啓蒙活動が課題であることを提示した⁽⁴¹⁾。啓蒙活動の具体案としては「児童教育、初等教育養成、中堅活動家養成、国語習熟運動、文化映画、講演等手段」とされ、「これらによる一般啓蒙宣伝活動は朝連の最も重要な緊急な課題である」とその重要性が強調されている⁽⁴²⁾。なかでも国語、すなわち朝鮮語教育は特に重要視された⁽⁴³⁾。

このように、同胞大衆への啓蒙活動が文化部における主目的として提示されたが、これを地方の末端まで行き渡らせるのは簡単ではなかつたようだ。前述の第二回文化部長会議では半年前の一九四六年一月におこなわれた前回会議の決議事項についても報告されているが、「朝連組織を強化し同化向上を図るため遊説隊を設置し地域別に遊説する」とあるように⁽⁴⁴⁾、すでに地方に向けた対策案

が出されていたことが確認できる。今後の活動方法の討議では「各地方本部が文化活動を等閑視」している状況を指摘し、啓蒙活動として中総の倉庫にある出版物の在庫を積極的に発送することが、末端組織を強化する手段であるという提案もなされている。⁴⁵⁾ 他にも、新しい書籍の発行を急ぐことや、出版物を効果的にいき渡らせるためには、各本部に送るべきか末端の支部に直接おくべきかといった、具体的な対策が議論されている。このことから、文化部の活動の中心は啓蒙活動にあり、それを地方に行き渡らせることが課題となっていたといえよう。巡回楽団を創出し遊説隊員を同行させた背景には、こうした文化部による活動が地方まで行き届かない状況があつたと考えられる。

本章では、朝連文化部が結成した地方巡回楽団の活動と、それがなぜ啓蒙活動と結びつけておこなわれたのかについてその背景を考察した。巡回楽団は、同胞慰安大会の成功を受けて企画された啓蒙活動の一環であったが、期待していた成果が出せず解散となった。その要因として、楽団員の問題と、同胞大衆を観衆として動員する観賞型公演の持つ啓蒙活動への応用限界性を指摘した。成

果を得られずあえなく解団となったものの、巡回楽団という音楽活動は、朝連文化部が直面する地方への活動浸透という課題を背景にして実施された企画であり、在日朝鮮人運動におけるいわば現地実践的な役割を担っていたといえる。

次章では、こうした従来の活動への批判から「文化の大衆化」という新たな課題が提起されるが、それが文化活動にどのような影響を与えたのかを検討しよう。

三、文化の大衆化にむけた文化啓蒙活動の模索

1. 大衆乖離への反省

巡回楽団が解散されて以降、同様の音楽活動についての報告はなされていないが、一九四七年一月第九回中央委員会にて文化部が文教局に改編⁴⁶⁾されると、その後の同局の文化活動報告に変化がみられるようになる。⁴⁷⁾

一九四七年九月におこなわれた第一一回中央委員会では、それまでの文化活動に対する自己批判として、活動の貧弱さや教育事業への偏重などが述べられ、「大衆芸能

運動の振興」として文学や美術、音楽、演劇、舞踊などの部門別コンクールを設けることなどを協議し⁽⁴⁸⁾、文化の大衆化のための活動として「大衆の創意性を発揮させる運動（サークル、読書会、研究会、自立劇団、競演会、展覧会等）」をおこなうことを可決した⁽⁴⁹⁾。

それから約四ヶ月後の一九四八年一月におこなわれた第一三回中央委員会では、さらに具体的な方針を決議しており、「民主主義民族文化理論の確立」「文化の大衆化」「文化の交流」「生活文化の向上」「文化人の組織と文化団体に関する活動」の五つがあげられ、一九四七年一月から約三ヶ月間にわたりこれらに立脚した活動を展開したと報告している⁽⁵⁰⁾。特に、文化の大衆化にかんする報告では、大衆乖離への言及と状況打開のための課題が提起された。報告では「従来のような大衆から離れた文化運動を批判し、文化の大衆化を文化運動の根本理念とする再認識をおこなった」と述べられており⁽⁵¹⁾、活動の方針において根本的な見直しはかられたとみられる。他にも「文化人懇談会等を通じて、文化運動の正確な方向と実践方法の基本的理念において一定した焦点を得られた」とあり、「文化運動の新しい胎動がみられ、また新文化人

の組織もみられるなど、文化運動の革命が起きている」といった、従来の活動との変化を強調する報告がなされている⁽⁵²⁾。このように、文化の大衆化が運動の方針として明確に打ち出されることとなった。

在日朝鮮人運動において文化大衆化が議論されたのは一九四七年九月頃であったが、一九四六年の『解放新聞』にはすでにこれにかんする北朝鮮における議論が紹介されていた⁽⁵³⁾。一九四六年九月二五日付『解放新聞』に掲載された金日成による北朝鮮文化人大会での演説では、従来の北朝鮮の各宣伝員や芸術家、文化人らが大衆のなかに入っていけなかったことを指摘したうえで「大衆を訪ね、大衆が聞き取れる言葉を話し、大衆が望む文章を書き、大衆が要求することを表現し解決し、大衆と同じ衣服を着て、大衆から学びまた大衆に教えてあげなければならぬ」と、活動にあたっての基本方針を提示している⁽⁵⁴⁾。当時の北朝鮮においても文化人と大衆の乖離は課題とされ、打開が模索されていたといえよう。

この演説同様、朝連文教局でも文化人の在り方という課題が、文化大衆化が提起されるにあたり問われた。前述の第一三回中央委員会では、「既存の文化団体とそこに

属する文化人に対する根本的態度を決定することになった」とし、その態度について「民主主義民族文化樹立に対する自覚を得ることで、旧態を脱ぎ、新しく自発的な文化を再編成するために積極的な協力」をすることだとした。⁽⁵⁵⁾これにより、すでに文化人の先頭に立つものとして文学団体が新たに組織され、文化運動に大きな影響を与えているほか、専門別文化人の再編成も近い将来結成される見通しだという。⁽⁵⁶⁾実際、一九四八年一月「在日本朝鮮文学会」が組織され、同年三月には「在日本朝鮮民主音楽同盟」が結成された。⁽⁵⁷⁾このように、文化人組織の改編も伴いながら、文化人や芸術人が文化の大衆化にむけていかに取り組むのかという根本的な問いかけがおこなわれたのであった。

2. 活発化する大衆の文化活動と文教局の方針転換

こうして、大衆乖離打開にむけた朝連文教局の文化活動方針が定められ、文化人や団体は再編成に動いた。とはいえ、大衆的な文化活動の基盤を持ってこなかった朝連文教局がこうした方針変化をおこなった背景とはいか

なるものであったのだろう。この点を考えるうえで注目されるのが、もともと大衆芸能活動が盛んだった民青や在日本朝鮮学生同盟（以下、学同）、女同らの活動である。

特に当初から民青の芸能活動の基盤を作りあげてきた朝鮮芸術家同盟（以下、芸同）⁽⁵⁸⁾の取り組みは重要である。芸同は「人民大衆の芸術のためにその前衛隊となることを宣言」し、活動方針を「（一）朝連、民青、婦同と提携し芸術の大衆化を図り、これを通じて大衆啓蒙に努力する。（二）誰もが演じられる脚本を民青と発行し芸術（演劇）に対する関心を高め、実際に指導する。（三）機関誌を発行し民青と共同で壁新聞を発行する。（四）各専門家をよび講習会を開く」と定めた。⁽⁵⁹⁾要するに、芸同は先述した文化の大衆化を朝連文教局に先駆けて課題として定め、これを具体的に実践していたのである。

方針にもあるように芸同の活動は、芸術人や文化人が同胞大衆に向けて公演を披露するよりは、同胞大衆を積極的に技術指導し、公演そのものに出演させることにより力点を置いていたといえる。解放新聞には、民青員たちに指導している演劇が近日公開予定であり、事務所内に練習用の舞台を設置する計画も準備していると報じら

れるなど、活動は本格的に進んでいたようだ⁽⁶⁰⁾。芸同は、民青だけでなく他の関連団体にも「移動文化教室」として出向き、レコード鑑賞、音楽コンクールや演奏会の開催、それぞれに合唱団や舞踊団、管弦楽団をつくる計画をもっていた⁽⁶¹⁾。朝連文教局が文化大衆化の課題に取り組むことになったのは、こうした芸同による実践の継続が関係したと考えられる。

実際、前述の第一一回中央委員会では「文化活動に対する自己批判」として、「一般文化人、学同、民青、婦同等」「一字不明」一般文化推進隊に対して有機的に活動する組織的体系が立てられなかったこと⁽⁶²⁾があげられている。民青や学同では地域における慰安大会や演劇会を独自におこなうなど芸能活動が活発で⁽⁶³⁾、こうした活動の蓄積を活かす連携体制の構築を文教局では企図し始めていたとみられる。言い換えれば、文教局は同胞大衆による音楽（芸能）活動の蓄積によって、文化の大衆化という課題に取り組むことが可能になったともいえ、それゆえ独自の楽団を新たに創設するといった活動方法を取らずに、関連団体の活動を奨励する方法に軸足を移していったとみられるのである。つまり、一九四七年前半から活

発化した大衆の文化活動によって、文教局の活動が変化した側面があると考えられるのである。

こうした文教局の活動について一九四八年七月の第一回中央委員会では、「同胞慰問の音楽会の開催等」は「在日本朝鮮文学会」や「在日本朝鮮民主音楽同盟」を主にしておこなう旨が報告されているほか⁽⁶⁴⁾、「広範な在留同胞の文化創造力育成を促し、民主民族文化の昂揚と発展普及を期して」朝連文化賞を制定したと伝えられている⁽⁶⁵⁾。このように朝連文教局は、関連する専門家団体と大衆の音楽（芸能）活動を奨励することを通して、文化大衆化への取り組みに合流していったのである。

こうして、朝連文教局の活動が大衆の音楽（芸能）活動と合流したことで、文化活動と啓蒙活動の関係にも変化がみられるようになる。先述の第一一回中央委員会では、文教局が女同の活動について「比較的活発な地域においては（中略）婦女演劇団組織、合唱隊組織（中略）等の主に文化啓蒙による活動がある」と報告しているなど⁽⁶⁶⁾、音楽（芸能）活動と啓蒙活動が合わさった文化啓蒙活動として実施されている様子がうかがえる。また、一九四八年三月六日におこなわれた民青結成一周年記念大

会については、「娯楽にあつて単に革命家を画的に強要するのではなく、構想に気を配ることで興味によつてこれを率いることができるし、新しい人民的民族文化創設に力を尽くすことになるだろう」という参加者からの投稿が寄せられている。⁽⁶⁷⁾ここでは、音楽（芸能）活動を通じて（観念的ではない）興味による学びは、新しい民族文化の創設につながるという、文化啓蒙活動に対する一つの見解が示されているといえよう。

大衆による音楽（芸能）活動が、文化啓蒙活動としての役割を果たすようになるのは、従来の観賞型公演から大衆参加型の音楽活動へと、文化活動の組織方法が移行したこととかわつている。大衆参加方式で組織する音楽活動は、芸術人らによつて組織される観賞型の公演とは異なり、同胞大衆を直接舞台に出演させることに目的が置かれる。そのため、大衆を運動により直接的に網羅することができ、かつ参加者は演目内容をこなすことで文化的素養を体験的に身につけることになる。大衆参加型の音楽活動が文化活動の方法として定着することで、運動への結集と文化的な啓蒙を効果的に実践できる文化啓蒙活動として機能したのである。巡回楽団など一九四

六年当初に主流であつた観賞型公演は、演奏を披露しここに同胞大衆を動員するという活動方法をとるため、啓蒙活動と聴衆の関心喚起の両立にはジレンマが生じていたが、文化大衆化に向けた大衆参加型の音楽活動が実施されるにつれ、このジレンマは解消に向かつたといえよう。

こうして、大衆による音楽（芸能）活動が活発になるなか、一九四八年一〇月頃からは、民青東京本部⁽⁶⁸⁾によつて文化工作隊（以下、文工隊）の創団がおこなわれる。⁽⁶⁹⁾これが端緒となり、一九四九年三月に『文工隊中央協議会』が組織され、朝連をあげた全国規模の活動として実施されることになった。こうして、文化大衆化にむけた取り組みは大衆参加型の音楽活動である文工隊活動へと移行していったのである。文工隊はその後も活発化し、一九四九年九月の朝連・民青強制解散後、約一年間は活動の様子が伝えられていることから、文化大衆化の活動は各地域に根付いていったといえるだろう。⁽⁷⁰⁾

結論

本稿では、「解放」後在日朝鮮人運動における音楽活

動、特に朝連による音楽活動の事例を検討し、それが運動として果たした役割や意味について、音楽活動の組織方法や演目内容の変化に注目し考察をおこなった。一九四五年末から一九四六年初頭にかけて開催された、朝連主催の音楽活動である朝鮮独立祝賀会と同胞慰安大会の目的は対外交流や親善、慰安事業であり、プロの音楽人や芸術人によつて上演される観賞型の公演として実施されていた。両者とも観賞型の公演として組織されていた点では共通性があるが、前者では同胞大衆を副次的な対象として捉えた演目内容であつたため反響がみられなかつた反面、後者は流行歌や民謡など同胞大衆に身近な音楽が取り入れられたことにより観衆からの好評を博した。

そこで朝連は、音楽活動の動員力を啓蒙活動に活用しようとして地方巡回楽団を組織し遊説隊を同行させ地方への活動強化に乗り出した。このように、巡回楽団は同胞慰安大会の成功を受けて企画された啓蒙活動の一環であつたが、期待していた成果が出せず解散となつた。その要因として、楽団員の問題と、同胞大衆を観衆として動員する観賞型公演の持つ啓蒙活動への応用限界性を指摘した。観賞型の音楽活動は大衆をその場に動員するには効

果が見込めるが、より効果的に動員するには聴衆の関心を惹きつける上演内容も求められるため、啓蒙活動との両立に際してジレンマを抱えるのである。こうして成果を得られずあえなく解団となつたものの、巡回楽団の活動は、文化部による活動が地方まで行き届かない状況を背景に企画されたものであり、文化部の活動の中心であつた啓蒙活動を現地で実践しようとした事例であるといえる。

一九四七年以降はこうした従来の活動への反省が加えられ、朝連の文化活動方針にも変化が生じる。第一一回中央委員会以降、在日朝鮮人運動として文化大衆化が方針として打ち出され、文化人や芸術人が文化の大衆化にむけていかに取り組むのかという根本的な問いかけとともに、文化人組織の改編と再編成がおこなわれた。だが、大衆的な文化活動の基盤を必ずしも持ててこなかつた朝連文教局の活動方針が転換したのには背景となる要因があつた。それは、もともと大衆芸能活動が盛んだつた民青や学同、女同らの活動とその基盤を作り上げた芸同の存在であつた。文教局は、先駆けて活発化していた同胞大衆による音楽（芸能）活動の蓄積によつて、文化の大

衆化という課題に取り組むことが可能となったのであり、独自の楽団を新たに創設するといった活動方法を取らずに、関連団体の活動を奨励する方法に軸足を移したのである。一九四七年前半から活発化した大衆の音楽（芸能）活動は、文教局の文化活動に変化をもたらし、文教局は大衆参加型の活動を奨励し連携する活動を通して、文化大衆化への取り組みに合流していった。

大衆の音楽（芸能）活動と朝連文教局の活動の合流は、文化啓蒙活動の展開を後押しすることにもつながった。これは、従来の観賞型公演から大衆参加型の音楽活動へと文化活動の組織方法が移行したことで、啓蒙活動との両立に際して生じていたジレンマが解消されたこととかわわっている。つまり、大衆参加型の音楽活動が文化活動の方法として定着することで、運動への結集と文化的な啓蒙を効果的に実践できる文化啓蒙活動として機能したのである。

その後、文化大衆化の活動は文工隊活動として活発化し、一九四九年三月に「文工隊中央協議会」が組織、全国規模の活動として実施された。一九四九年九月の朝連・民青強制解散後も約一年間は活動を継続するほど、文

工隊活動によって文化の大衆化が各地域に根付いていったのである。

ここまで、「解放」後におこなわれた朝連による音楽活動の事例を検討し、それが運動として果たした役割や意味について明らかにした。だが、日本社会、あるいは朝鮮半島における文化活動とのかかわりについては検討しておらず、課題が残されているといえる。特に本稿で検討した地方巡回楽団は、一九三〇年代にプロレタリア音楽同盟（以下、PM）がおこなった移動音楽隊の活動と類似しているほか、PMの活動スタイルは日本敗戦後の文化工作隊海つばめ、その後のわらび座へと受け継がれたと言われている⁷¹⁾。このように、在日朝鮮人運動において実施された文工隊活動と日本の共産主義運動においても検討する必要があるといえるだろう。また、はじめににおいても述べたように、運動体による文化活動が同胞大衆の側からどのように捉えられていたのかといった受け手側の考察をおこなわなかったため、今後の課題としたい。さらに、本稿で検討した朝連期の活動の意義を考える上では、大衆の音楽活動として活発化した文工隊活

動が朝連・民青強制解散後いかに継承され、あるいは断絶したのかについても調査する必要がある。本稿で明らかにしたことと併せてこれらの課題に取り組むことは、在日朝鮮人運動における音楽活動をより詳細に明らかにするうえで重要であると考えられる。

【注】

- (1) 文化活動を主に担ったのは朝連文化部（のちに文教局）であった。文教局への改編は一九四七年一月におこなわれた第九回中央委員会にて。朴慶植『解放後在日朝鮮人運動史』三一書房、一九八八年、一四一頁。
- (2) 当時各地でおこなわれていた文化工作隊運動を全国規模で一層積極的に展開するために、朝連が一九四九年三月二四日に組織した。呉圭祥『ドキュメント在日朝鮮人連盟一九四五—一九四九』岩波書店、二〇〇九年、二八二頁。
- (3) 前掲『解放後在日朝鮮人運動史』
- (4) 山根俊郎『在日朝鮮人運動資料集 一カラスよ屍を見て啼くな：朝鮮の人民解放歌謡』長征社、一九九〇年。
- (5) 前掲『ドキュメント在日朝鮮人連盟一九四五—一九四九』
- (6) 成恩暎「終戦直後における在日朝鮮人の文化活動—在日

本朝鮮人連盟によるオペラ「春香」の企画を中心に」（『年報地域文化研究』一四号、二〇一一年、一九六〜二一七頁）。

- (7) 同前、二一三頁。
- (8) 宋安鐘『在日音楽の100年』青土社、二〇〇九年。
- (9) 鄭栄桓『朝鮮独立への隘路 在日朝鮮人の解放五年史』法政大学出版社、二〇一三年、一八〜一九頁。
- (10) 同前。
- (11) 「在日朝鮮文化年鑑」八五頁、『在日朝鮮人関係資料集成〈戦後編〉』（以下、『集成』）第五巻。
- (12) 前掲『解放後在日朝鮮人運動史』一四四頁。
- (13) 前掲「終戦直後における在日朝鮮人の文化活動—在日朝鮮人連盟によるオペラ「春香」の企画を中心に」二〇二頁。
- (14) 共立講堂は、共立女子大学の講堂として1988年に落成した三二〇〇人を収容できる大規模コンサートホールで、一般には神田共立講堂と呼ばれていた。鉄筋コンクリート造り、外観は縦型の付け柱によるゴシック調のデザインである。規模や設備においても日比谷公会堂と並ぶ大講堂で、敗戦後の当時はこうした大講堂が少なかったこともあり、音楽関係の公演のメッカとして知られるようになった。 (<http://www.kyoritsu-wu.ac.jp/campus/ins>)

tution/koudou/ 二〇一六年三月六日アクセス) 朝連の大会や集会、文化芸術団体の公演などにもこの神田共立講堂が多く使われた。

- (15) 「文化部活動報告書 在日本朝鮮人連盟第三回全国大会部別報告書並参考書類綴」(以下、「文化部活動報告(朝連第三回全国大会)」) 一九四六年、一九頁、『集成』第一巻。

- (16) 同前。
(17) 同前。

- (18) 前掲「在日朝鮮文化年鑑」八五頁。ウィリー・フライは、一九三六年にドイツから来日したポーランド出身のヴァイオリニストである。

- (19) 林光徹「芸術と人民大衆―文化部活動報告に代えて―」『朝連文化』創刊号、一九四六年、五五頁。

- (20) 「板橋慰安大会」『民衆新聞』一九四六年七月一日付。「荒川慰安大会」『解放新聞』一九四七年二月二五日付。「慰安大会開催に両国人民が提携―埼玉」『解放新聞』一九四七年三月一日付。「健全な娯楽を―荒川同胞慰安演芸会盛況」『解放新聞』一九四八年二月二五日付。「同胞慰安大会―広島女同主催で」『解放新聞』一九四八年三月二〇日付。

- (21) 「慰安大会開催に両国人民が提携―埼玉」『解放新聞』一

九四七年三月一日付。川口軽音楽団は、流行歌や民謡を主に扱うアマチュアバンドであると推測される。

- (22) 前掲「文化部活動報告(朝連第三回全国大会)」二〇頁。
(23) 山根俊郎は前掲書において、川口軽音楽団のデビューは一九四七年二月と推測しているが、管見の限りではこの同胞慰安大会が最も早い。前掲『在日朝鮮人運動資料集 一カラスよ屍を見て啼くな朝鮮の人民解放歌謡』三四六頁。

- (24) 同前、六四〇六七頁。

- (25) 同前、二〇頁。
(26) 在日本朝鮮人連盟中央総本部文化部『朝連資料第五集 第二回全国文化部長会議録』(以下、『第二回全国文化部長会議録』) 一九四六年、二三頁。

- (27) 前掲『ドキュメント在日本朝鮮人連盟一九四五―一九四九』二六三頁。

- (28) 前掲「朝連文化」五五頁。

- (29) 同前。

- (30) 前掲「第二回全国文化部長会議録」二三頁。

- (31) 前掲「終戦直後における在日朝鮮人の文化活動―在日本朝鮮人連盟によるオペラ「春香」の企画を中心に」二二一頁。

- (32) 同前、二二二―二二三頁。

- (33) 前掲「文化部活動報告(朝連第三回全国大会)」二二頁。
 (34) 同前、二〇頁。
 (35) 同前。
 (36) 同前、二二頁。
 (37) 同前。
 (38) 前掲『第二回全国文化部長会議録』二二〇―二二四頁。
 (39) 同前、二六頁。
 (40) 同前、五頁。
 (41) 同前。
 (42) 「第七回中央委員会々々録」四五頁、『集成』第一巻。
 (43) 第二回文化部長会議における「国語教育徹底に関する件」では、国語教育は「啓蒙運動と密接な関係」があるが、それは「大衆自身が読んで批判しなければならぬ」からであるとしている(前掲、『第二回全国文化部長会議録』四七頁)。一九四六年八月時点で、啓蒙活動は「今後一年以内に国語の会話ができない同胞と国文を解読できない同胞を一掃」することを目標にかかげている(前掲、『第七回中央委員会々々録』五一頁)。
- (44) 前掲、『第二回全国文化部長会議録』二〇頁。
 (45) 同前、二九―三〇頁。
 (46) 前掲『解放後在日朝鮮人運動史』一四一頁。
 (47) 成恩暎は、朝連の活動として「文化」と「教育」に関する

- る件が実質的に分離された時点として、一九四七年九月の第一回中央委員会を指摘している。前掲「終戦直後における在日朝鮮人の文化活動―在日本朝鮮人連盟によるオペラ「春香」の企画を中心に」一四一頁。
 (48) 「第一回中央委員会議事録」一一〇頁、『集成』第一巻。同前、一五一頁。
 (49) 「第一三回中央委員会議事録」三四―三五頁、『集成』第一巻。
 (50) 同前、五三頁。
 (51) 同前。
 (52) 「大衆の文化を建設しよう 金日成將軍演説(上) 北朝鮮文化人大会にて」『解放新聞』一九四六年九月二五日付。
 (53) 「大衆に教え、大衆に習おう 金日成將軍演説(下)」『解放新聞』一九四六年一〇月一〇日付。
 (54) 前掲「大衆の文化を建設しよう 金日成將軍演説(上) 北朝鮮文化人大会にて」
 (55) 前掲「第一三回中央委員会議事録」一五三頁。同前。
 (56) 前掲、『在日朝鮮人運動資料集一 カラスよ屍を見て啼くな・朝鮮の人民解放歌謡』三三〇頁。
 (57) 朝鮮芸術家同盟は、前身団体である朝鮮芸術協会(一九四六年創立)を組織改編し一九四七年三月に発足、在日

朝鮮人の演劇人を中心とした総合芸術団体である。その後芸同は、一九四七年一〇月第四回全国大会にて打ち出された文化団体の単一組織化方針によって複数の団体に分岐し、一九四八年一〇月に発展解消した。これについては、前掲『在日朝鮮人運動資料集一カラスよ屍を見て啼くな…朝鮮の人民解放歌謡』三三二～三三三頁に詳しい。

(59) 「芸術家同盟にて練習舞台計画中」『解放新聞』一九四七年四月一五日付。

(60) 同前。

(61) 「芸術家同盟今後活動方針」『解放新聞』一九四七年七月一日付。

(62) 前掲、「第一一回中央委員会議事録」一一四頁

(63) 「岐阜民青 活発な演劇運動」『解放新聞』一九四七年二月二五日付。「民青兵本にて芸術運動展開」『解放新聞』一九四七年三月五日付。「民青東本の芸能運動」『解放新聞』一九四七年四月五日付等。また、民青東京本部は、独自の演劇集団「希望座」を結成し一九四七年頃から活動をおこなっていた。前掲、『在日朝鮮人運動資料集一カラスよ屍を見て啼くな…朝鮮の人民解放歌謡』三六二頁。

(64) 「第一五回中央委員会文教部活動報告書」四～五頁『集

成』第一巻。

(65) 「文化賞制定」『解放新聞』一九四八年八月一五日付。

(66) 前掲「第一一回中央委員会議事録」九〇頁

(67) 「新しい文化運動―民青同務たちのシュプレヒコールをみて 車一影」『解放新聞』一九四八年三月二〇日付。

(68) 民青は、一九四七年三月に全国組織が結成される以前の県本部時代から各地で文化活動に意欲的に取り組んでいた。前掲『在日朝鮮人運動資料集一カラスよ屍を見て啼くな…朝鮮の人民解放歌謡』三五九頁。

(69) 同前、三六五頁。

(70) 同前、三七一～三七二頁。

(71) 西嶋一泰「プロレタリア音楽家同盟における移動音楽隊の実践」(『生存学研究センター報告』一七号、二〇二二年、二八四～三〇六頁)。

二〇一六年四月一日 受稿

二〇一六年五月一日

レフェリーの審査を経て掲載決定